

氏 名	内 海 順 夫 うつ み のぶ お
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 88 号
学位授与の日付	昭 和 38 年 6 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	老人歯病学に関する統計学的研究 とくに、現有歯、咬合歯、咀嚼歯の実態について
論文調査委員	(主 査) 教 授 鈴 江 懐 教 授 美濃口 玄 教 授 岡本耕造

論 文 内 容 の 要 旨

わが国人も近年、科学知識の長足の進歩と衛生思想の普及にともない、その平均寿命が延びて高齢化傾向が強くなったから、老人医学がとみに抬頭した。したがって老人医学の一部門として老人歯学の必要性も唱えられるようになり、老人の歯、口、顎の実態把握と口腔疾患の治療の必要性が強調されてきたものの、他科にくらべれば、至って低調である。かかる観点から老人の歯、口、顎の老衰現象の程度、口腔疾患の罹患程度、治療実績などの実態を究明することは老人歯学の基礎知識としてまことに望ましいが、わが国の老人歯学に関する研究は着眼後日なお浅く、従来この方面の系統的調査研究はまこと僅少で、とくに咬合歯ないし咀嚼歯に関するものは、わずかに大橋の401名についての報告があるにすぎない。

このような現状にかんがみ、著者は先年来、近畿地区養老院入所者の60才以上の老人3,000名について食物の咀嚼については消化吸収に重要な意義をもつ咬合および咀嚼を営む歯がどの程度あるかを性別、歯の部位別、顎別などについて系統的な調査研究をおこない、つぎのような実態成果を取めた。

1. 現有歯について

- 1) 被検者の約89%が現有歯保有者であった。
- 2) 被検者1人当りの現有歯数は15.84歯であった。
- 3) 総現有歯数に対する現有歯率は上下顎とも犬歯が最高率で、前歯部47.56%、小臼歯部28.38%、大臼歯部24.06%であり、左右側はほぼ相称性で、顎別では下顎が高率であった。

2. 咬合歯について

- 1) 被検者の52.37%、現有歯保有者の59.08%が咬合歯保有者であった。
- 2) 被検者1人当りは9.33歯、現有歯保有者1人当りは10.52歯が咬合歯であった。
- 3) 現有歯数に対する咬合歯率は約59%で、男女別では男が約56%、女は約61%であり、顎別では上顎が高率で、経年代的には低率になっていた。
- 4) 部位別現有歯数に対する咬合歯率は前歯部約60%、小臼歯部は約59%、大臼歯部は約56%で前歯部

が高率であった。顎別では上顎では前歯部が高率で、下顎は大臼歯部が高率であった。

5) 総咬合歯数に対する部位別咬合歯率は前歯部が約48%, 小臼歯部が約29%, 大臼歯部が約23%, 前歯のうちでも犬歯が最高率で、左右側はほぼ相称性であった。

3. 咀嚼歯について

1) 被検者の約66%, 現有歯保有者の約75%が咀嚼歯保有者であった。

2) 被検者1人当りでは約12歯, 現有歯保有者1人当りでは約14歯が咀嚼歯であった。

3) 咀嚼歯数は経年代的には減少する。

4) 現有歯のうち約78%が咀嚼歯であった。

5) 現有歯数に対する咀嚼歯率は男が約76%, 女は約80%で女のほうが高率で、顎別では下顎が高率であった。また年代別では70才代の78.62%が最高であった。

6) 部位別現有歯数に対する咀嚼歯率は前歯部が約82%, 小臼歯部が約77%, 大臼歯部が約71%で、顎別では上顎は前歯部が高率で、下顎では大臼歯部が高率であった。

7) 総咀嚼歯数に対する咀嚼歯率は前歯部が約50%, 小臼歯部が約28%, 大臼歯部が約22%で、上下顎別では下顎のほうが高率であった。

以上著者の調査結果から老人の咬合, 咀嚼能力のきわめて低いことが判明した。

歯の喪失による咀嚼能力や咬合力の低下は全身的にもまた口腔諸組織にも多かれ少なかれ悪影響を及ぼすとの上野正の記述や, Rodriguez の咀嚼機能の低下により老化を助長するとの発表, ならびに Ivaldo の胃障害や体重の変動が咀嚼に関連するとの記載などからも老人の咬合, ないし咀嚼力を回復させることは老人が健康を維持して働き, かつ日々を楽しく過すうえからも重要なことである。

この意味からも老人化人口に移行しつつあるわが国としても, この荒廃した老人の歯, 口, 顎を治療するよう老人(年)歯病学の体系を確立することこそ, 歯科医師の大いに努むべき社会的事業であると痛感する。

論文審査の結果の要旨

老年学 Gerontology は欧米ではすでに古くから検討されており, とくにアメリカではその発展がめざましく老人に関する医学, 心理学, 生物学, 社会学など各方面から多彩な研究がなされている。そのうちの老人医学は1909年アメリカの Nascher がはじめて Geriatrics なる語をもちい, 1940年頃から急速にその拡充がみられ, 老人の基礎医学的研究, 臨床医学的研究, 社会医学的研究などの体系ができつつある。

わが国においても第2次世界大戦以後, 医学の長足の進歩と社会施設の改善とがあいまって, 平均寿命の延長が見られ, 国民の老令化傾向がめだってきた。それにもなって老人病学会の創立や大学における講座の開設などがこころみられ, とみに老人医学の抬頭がめざましい。当然その一部門としての老人歯病学 Gerodontics の必要性も高唱せられているのであるが, 数年前までは正木, 小野, 桧垣らがそれぞれ, 老人歯科学, 老年歯(病)学, 歯科老人病学などの名目のもとに, 研究発表を試みているが他の領域にくらべてその実情はまことに低調なるものであった。

このような観点からも老人の歯口顎の老衰現象の程度, 口腔疾患の罹患状況, 治療実績の浸透度などの

実態を把握することは老人歯病学の基礎知識を調整するうえにきわめて緊要であると考えられる。かくて著者は先年来、近畿地区の養老院に入所している総計 3,000 名という多数につき、掲題のごとく、その現有歯、咬合歯、咀嚼歯などを性別、顎別、歯牙の部位などの観点から系統的な口腔病理学的調査研究を行ない、幾多の新しい成果をおさめたのである。そうして、近年とみに老化人口に移行しつつあるわが国の荒廃した老人の歯、口、顎につき、老年歯病学に確固たる体系を樹立すべき有力な資料を提供しているのである。

以上により本論文は学術的に有用なものであり、医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。